

≡≡≡文献抄録≡≡≡

理学療法における非言語的技術との関連

非言語的行為はコミュニケーションの主要な部分を形成している。非言語的メッセージの解釈と潜在的認識とのうえに、相互関係が成り立っている。非言語的技術をより意識し、その使用を重要視してゆくことは理学療法士と患者との関係を深め、治療の質を高めるであろう。この技術に関連し、その専門分野での実施における論理的根拠について検討する。

20世紀は、個人、社会、国家に有益な科学技術が例をみない進歩を遂げた。しかし同時に人々は現代生活のストレス、価値観の変化、急激な変動に対処するため精神的不安定を感じている。科学工学分野の技術革新は必然的に人間性の喪失を引き起こした。これは医療分野にも当てはまり、専門性の進歩が患者のニーズを断片的にし、全体的観点からの考察を困難にし結果的に患者に不利益を生じている。多くの研究者が精神的不安と身体的病状の強い相互関係を指摘している。医師-患者関係が治療効果に影響を与えるのと同様の

ことが、理学療法士-患者関係にも言える。

非言語的行為として接触、空間の利用、表情、視線、動作、身振り、姿勢、声の高低、観察、聞くこと、沈黙の利用が挙げられる。これらは患者に対する親密さと、優位性を示すものとに大別される。例えば接触、近接、微笑、親しみやすい声の高さ、アイコンタクトは親密を表す。治療では親密さを示す行為がより効果的であると Gallois は言っている。

非言語的技術は理学療法士と患者との相互作用の大きな部分を占め非常に重要である。それゆえ学生のレベルで、VTRの利用、ロールプレイ、グループ討議などにより全体論的視点や非言語的技術が教えられるべきである。

また、言語的メッセージと非言語的なもののが不一致となると患者は混乱してしまう。非言語的技術を注意深く使用すれば、理学療法士と患者との関係を深め、協力の雰囲気を作り出し効果的なりハビリテーション治療を実現するであろう。

Hargreaves S : The relevance of non-verbal skills in physiotherapy. *Physiotherapy* 73 : 685-688, 1987

(国立厚労リハビリテーション学院)

理学療法士 小林 照美)

≡≡≡文献抄録≡≡≡

慢性閉塞性肺疾患急性増悪患者における機械的振動の効果

カナダにおいては、排痰を必要とする呼吸器患者に対して、バイブレーター (Wahl 4300) を使用した治療が10年間で著しく増加している。この文献では、バイブレーター (Wahl 4300) による機械的振動が慢性閉塞性肺疾患患者の急性病態悪化に対して、いかなる効果を示すかについて検討している。

被検者は24名(男17名、子7名)の慢性閉塞性肺疾患急性増悪患者(入院20名、外来4名)であり、年齢は66±11歳、排痰量は65±72 mlであった。

実験は治療日と非治療日との二日間で構成され、第一日目を治療日とするか非治療日とするかはランダムに決定された。非治療日にはポジショニング(机上に両肘を、枕上に頭部を載せた安楽椅座位)のみを、治療日には前述のポジショニングに加え、バイブレーターによる機械的振動を与えた。バイブレーターは約30秒間で移動し、必要とされる部位に15分間ずつ施行した。治療前および治療後(5分、30分、60分、24時間後)の

1秒量 (FEV_{1.0})、努力性肺活量 (FVC)、酸素飽和度 (SaO₂)、がそれぞれ測定され、60分後および24時間後の排痰量が測定された。実験中は理学療法をはじめすべての治療行為を不変とし、実験開始前2時間は理学療法は施行されなかった。

その結果、FEV_{1.0}、FVC、SaO₂ および24時間後の排痰量に関しては、t検定の結果、治療群と非治療群で有意差がなかったが、60分後の排痰量においては、治療群において非治療群に比較して有意に排痰量が増加した ($p < 0.05$)。

最後に、筆者は、バイブレーターによる治療後にみられた排痰量増加はわずかであり、臨床的效果を云々(うんぬん)するには至らなかったとし、バイブレーターによる機械的刺激の効果について言及するには、機械的振動の累積効果などについてのよりいっそうの研究が必要とされると結論している。

Pamela M, et al : The effect of mechanical vibration in patients with acute exacerbations of chronic obstructive pulmonary disease. *Physiotherapy Canada* 39 : 371-374, 1987

(信州大学医療技術短期大学部 理学療法士 斎藤 昭彦)

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

心臓病患者の余暇時間の使いかた

本研究は、心臓病患者の余暇時間(仕事や睡眠などを除いた拘束されない時間を指す。)の使いかたを健常者のそれと比較したものである。調査項目として、身体的休息のための活動に関する5種目、身体的活動に関する2種目、社会的活動に関する5種目、その他の活動に関する3種目の計4種類15種目を設定した。

対象は、初回の心筋梗塞で入院した男性15名と心臓疾患の既往の無い男性15名であった。患者群に対しては入院前一週間の生活パターンに、対照群に対しては現在の生活パターンに基づいて回答を求めた。

結果：身体的休息のための活動を除く、身体的活動・社会的活動・その他の活動の3種類において、行った種目数は対照群のほうが患者群より多かった。4種類15種目への一週間当たりの参加回数の総計では、両群の間に有意差はみられなかった。しかし、社会的活動の中でも外に出向いての活動と団体を結成するような組織化活動、さらにその他の活動に含まれる個人的

興味の活動などへの参加回数は、対照群が患者群より多かった。余暇に対する考えかたでは、「仕事以外のものすべて」と定義している者が患者群では87%、対照群では36%であった。余暇時間に取り組む姿勢に関しては、自分で身体を動かすよりは見学者として参加すると答えた者が患者群では73%、対照群では21%であった。

以上のことから、心臓病患者は身体的活動・社会的活動などへの参加が消極的な傾向を示し、余暇に対する考えかたは柔軟性に欠け一面的であると言える。心臓病患者の中で、非常に社会的活動に熱心な人や余暇時間を単に身体のリクスのみに使う人などに死亡率が高いと報告されていることから、筆者らは余暇時間を多面的に使うことによってストレスの軽減を計るべきだと述べている。また作業療法では、急性期治療プログラムに加え、退院患者の生活様式の変更を可能にするような長期にわたる治療プログラムの遂行を強調している。

Fitts HA, et al: Use of leisure time by cardiac patients. AJOT 41: 583-589, 1987

(弘前大学医療技術短期大学部)

作業療学科 進藤図南美)

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

文献に遅れずついてゆく

ATNR (asymmetrical tonic neck reflex) の研究：ATNR やその評価法に関する研究は1930年から続けられてきた。正常児では4～6か月ごろ消失し、それ以後の存在は中枢神経系の障害を暗示するものと認められてきた。Caputらは座位や背臥位で頭を回旋すると頭側の上下肢が屈曲し、顔面側が伸展したと述べた。50年前、Gesellは6か月までの乳児にみられ、その後も残存する場合は発達遅延を疑うと述べた。Bobathはストレス下では健康成人でもみられると発表した。しかし消失の時期は6か月とも8歳とも言われ、筋電図上では一生残ると述べた研究者もいた。1981年アメリカのOT, Annaは正常児にも発達障害児にもATNRを認めなかった、と観念の相違から異なった結果を発表した。このようにATNRは確証の無いまま定期のテストとして現在も用いられている。これはATNRが評価・治療の助けになるとしたBobathの影響によるが、彼女は原始系統発生のパターンの影

にすぎないとして現在は重視していない。VassellaとKarlsonはATNRを乳児108人中の60%にしか引き出せず、Parrは3～9歳の子どもの84人に存在を認めた。Eastonは病的サインでなく神経生理機能のサインと認め、MorrisonはATNRの臨床的評価は存在の有無だけでなく、頻度、持続、強さの評価を含むべきだと述べた。また、彼は高這(ばい)位でATNRを評価した際、正常児と障害児の間に違いを認めたが腹臥位では区別できなかったと述べている。よってATNRを評価する姿勢はRIPの四つ這い位(頭側の手を腰に、顔面側の膝を床から離す。)で頭を自動的に回旋させる方法が適当であるとされた。

結論：この研究の歴史からも効果的評価・治療のために作業療法士はつねに研究を続け、知識の再検討を繰り返さなければならないと言える。積極的に文献を読み時勢についていくことも研究の一つの方法なのである。

Kelly G, BSc, DipCOT: Keeping up with the journals; The strange case of the disappearing asymmetrical tonic neck reflex. BJOT 50: 298-299, 1987

(吉原病院(前国立南福岡病院) 作業療法士 佐伯美穂子)